

一お生まれは新潟県の新発田市ですね。

平地ですが山も海も近くて、雪が多いですね。 一冬になると一面真っ白ですか。

多いと腰ぐらい、1m以上ですね。今はだいぶ減りましたけどね。子どもの頃は雪かきとか雪おろしをしなくてはダメで。

一大学で東京へ行くまで、ずっと新潟。

18歳までは新潟で、受験に失敗して二浪したんですけど、1年は神奈川に住んで、もう1年は東京で受験した感じです。

一最初から彫刻をしたいと思っていたんですか。

はじめは絵が好きで、受験も二浪のなかばくらいまでは油絵を受験しようと思っていました。ただ考えすぎて、絵画理論の本を読み過ぎてわからなくなっちゃったというか……理屈で描くと絵が硬くなっちゃって。まあ、デッサンは好きだったし、石膏像もすごく美しいと思って好きだったし、あと仏像も好きだったんですよね。

一それで彫刻に変わったんですか。

受験勉強をしているときに、絵画科の先生が粘土もやった方が良いと言って、アバタのヴィーナスの石膏像の模刻をさせてもらったんですが、彫刻科の先生が学生を連れて私の作品を見せに来たんですね。出来が良かったらしいんですよ。そういうこともあって、向いているのかなって、そのときに自分の方向性を考えて。絵が煮詰まっていたのとちょうど重なって、彫刻に移った感じですかね。結局、半年くらい彫刻の勉強をして……あんまり勉強しないまま藝大に行っちゃった。

一彫刻に向いていたんですね。

向いていたんですかね。大学では金属をやっていました。いずれ社会に出たら木も石も自分でできるけど、金属はちょっとたいへんそうだと思って、大学の施設を利用できるものに挑戦したくて選びました。でも感覚が向いていたかというと……結構、頭で考えていた部分はあるかな。

厳しく見れる色っていうか、 形がよく分かる色って白なんですよね

一大学を卒業されてからは金属を離れた。

1~2年くらいはやってましたね。薄いアルミを買ってやっていたんですけど、なかなか環境も整わず、むしろ木とか石の方が作りやすかったんで、そちらに移っていった。一応ミックスで、木彫にアルミの金属をプラスした作品も作っていたんですけど、やっぱり、なかなかしっくりしないというか。一今はもう完全に木という感じでしょうか。

そうですね。ただ、金属の板材を重ねたような形態が面白かったりしたので、それを木で再現してみたりとかはやっていますかね。

一彫刻に彩色をされるのも理由があるんですか。

素材感から離れたかった。木目がきれいなので、工芸的な美しさが作品に出てきてほしくなかったというのもあります。金属は無機質じゃないですか。だから100%じゃないですけれども、偶然性があまりないというか、私の中から出てきたものがダイレクトに反映される。木はそのままで、とても魅力のある素材なので。

一その魅力を消したかった。

消したかったというのはありますね。自分なのか木なのか、わかんなくなっちゃいそうで。木が良くてそう見えているのか、自分から出てきたものなのかと……若かった部分もあると思うんです。今そうっていうわけじゃないですけれども。





一手跡を消したいのでしょうか。

手跡を消したいというのはなかったです。ただ 装飾的にならないように気をつけていましたね。 今さらなんですけど、雪みたいにみえますよね。そ う思って白くしたわけじゃないんですが、子どもの 頃雪で遊んだ経験が作品の色や形に影響してい るのかなとか、われながら思いますね。

-長谷川さんの彫刻の白のイメージは強いですね。 結局、厳しく見れる色っていうか、形がよく分かる色って白なんですよね。黒っぽかったり木目があったりすると、ごまかしがきくんです。全部白に塗ってしまうと、できていないところが見えるので。 -形が重要なんですね。

彫刻って形、みたいな気持ちが強かったんです。今はそんなでもないんです。だんだん、偶然があってもいいんじゃないっていうぐらいな感じに変わってきています。きっかけとしてはそれなんですけど、今作っていてそういう気持ちなのかと言われると、必ずしもそうではないんですね。

一雪だと気づいたのは最近ですか。

そうですね。奈良に住みはじめてからですね。

一白い絵具は何を使っているんですか。

日本画の胡粉です。木彫に胡粉というのは割と ポピュラーなので、特異なものではなくて、白くす るなら胡粉かなという感じですかね。

一金箔を使った作品は金属のように見えますね。

金箔は、学生のときにアルミの彫刻を作っていた名残もあって使いはじめました。当時は無機質で表現しやすい素材だと思って金属で作りはじめ

たのですが、キラキラ光るし、結構装飾的だったと思いますね。板材を使ったりすると、裏があったり表があったり、正面性が強くて、360度の視点に耐えられる形ではないので、彫刻の面白さからは遠ざかっていました。木や石の方が彫刻に近づきやすいのかな。

一金属を使って作られるときと、木や石を使うとき は、形も変わるんですか?

金属だと物理的にイメージに近づききれないん ですよね。木や石の方が自由度が高いですね。

一今作られている作品と、金属だった頃とのイメージの変化はあるんですか?

基本はそんなにないかな。金属で出したいと 思って出せなかった形を、木で作っているような感 じですかね。

―そうしたイメージは最初からあるんですか?

紙に落書きしたりしているうちに、浮かんでくる 感じです。

一粘土で作ってみるんですか?

粘土は最近使いはじめました。平面から三次元にぽんと行けなくなって、粘土にしてみないとわからなくなってきたので。手びねりをして、あ、こっちはこう見える、とか。計画していくけれども、あんまり精密には作らないので、彫りながらちょっと変わっていったり……

一実際のモノというより、見えないイメージ。

とにかく渦というか、くるっとした形は小さいとき から好きではあったんです。たとえば神社の欄干 についている宝珠。ああいう形が好きだった。いつ



までも撫でさすっていた感じで。金属でもこういう 形が作りたかったんです。でも難しくて作れなかっ たんですけど。パイプをベンダーでくるっと曲げた りしても、二次曲線にはなるけど三次曲線にはな らない。やっぱり彫っていくことでしか……

-360度の丸み。

金属では無理なんですよね。砂袋の上で板を叩いたりもするんですけど、もう鍛金の世界ですよね。鍛金の技術は私にはなかった。工芸に進んでいけばその技術もあったんでしょうけどね。銅の素材もあまり好きではなくて。ちょっと工芸的な感じが……昔は結構そういう、変にこだわりが強かったのかな。今はそうでもないですけどね。若い頃はなんであんなにこだわっていたんだろう。すごいこだわっていますよね(笑)。

一だんだん見方が広くなっていくんでしょうか。

自分の存在とか感性の境界線みたいなものが 希薄になってきている感じはありますね。勾玉とか 胎児とか、ああいうものにもすごく魅られますね。 あとは古い化石とか。

一アンモナイトとか。

胎児の形って、鳥も四つ足も人間も、最初の時点はかなり似通っているという話を、大学の頃の生物学の先生に学んだりして。スライドを見せられたときに、すごく感銘を受けましたね。ほかの動物は調和して生きているじゃないですか。何で人間だけ違うのかなって疑問があって。

人間は何か大事なことを忘れた 生きものみたいだという気持ちがあった

一それは若い頃から考えていたんですか?

大阪万博がありましたよね。あのとき「青い地球は誰のもの」っていう歌が流れたんですよ。そうしたら涙が流れてきて。独占しているじゃないですけど、地球を汚したり、ほかの動物はしていないことをヒトがしてしまっているって、子ども心によく分かっていたんだとは思います。みんなのものなの



いのちのゆくえ 2024年 楠、胡粉、箔 570×430×90mm



に、人間のものみたいにしているねって。良くない ことをしているような、切ない思いはその頃からあ りましたね。自分は人間だけど、人間は好きじゃな い。動物みたいだったらいいのにっていう思いは あって。何か大事なことを忘れちゃった生きものみ たいな気持ちはありましたね。

一作品も、人間のようで人間になっていないような。 そうなんですよね。思い出したいんだと思うんで す、本当はそうじゃないんだって、どこかで思って いるんですよね。ヒトって本当は違うんじゃないの かなって……

一彫刻家の安藤榮作さんと結婚されてから福島に 移られたのは、人間中心の生活から別の生き方を取り戻すようなことを考えていたんですか?

自分は田舎育ちなので、榮作ほど田舎に憧れるというのはなかったんです。ただ子どもがいたので、都会の、人間らしさや自然と切り離されるというか、そうではないところで子どもを育てたいという気持ちはすごくありましたね。

ーとはいえ、いわき市の田人という地域は、学年で 子どもが1人というような、すごいところでしたよね。

でも、すっごく良かったんですよ。引っ越そうか迷っていた頃に分校で運動会を見たんです。そうしたら鼓笛をやっていて、人数が異常に少ないんですよね。10人くらい、15人もいるかないないかなくらいの鼓笛を見ていたら、涙が出て。あまりに健気でかわいくて。みんなでやっている感じがよくわ

かったんですよ。子供たちひとりひとりと地域の人とのつながりの深さみたいなものとか。

―ああ……

自分が1000人いるような大規模小学校、大規模中学校を出て、高校もそうだし、幼稚園も田舎でいちばん大きい幼稚園で。その大勢の中のひとりというのではなく、ひとりひとりがとても大事にされている、その丁寧さっていうんですかね。それにすごく……でも1人というのはちょっとまずいんじゃないかと(笑)思いましたけど。まさか1人なのかと申し訳ない気持ちもありましたね、子どもに。

-1人だと、学校の授業もほかの学年の子どもたち といっしょにやるんですよね。

うん、複式ですね。下の学年の子といっしょのときもあれば、上の学年の子といっしょのときもあって。もう、みんなきょうだいみたいな感じで、1年から6年までいっしょに何かやるみたいな。

─それは楽しい体験でしたか。

と言ってくれてますね、子どもたちは。良かったって。いちばん田人が楽しかったって。

ー暮らしは大丈夫だったんですか? 生活が成り立つかどうか。おふたりとも彫刻家で……

全然成り立ってなかったと思うんですけど。何で生きてこられたんだろう(笑)。そのくらい本当に大変でしたね。

ー安藤榮作さんのエッセイ集『降りてくる空気』 (SMOLT、1997)には牧歌的に書かれていましたけ ど、長谷川さんはどのように思っていましたか。

榮作は夜中に自分は不安で目が覚めて眠れないとき、私が隣でぐうぐう寝ている、男は生活を背負って必死なのにって言っていましたね。私は案外能天気だったんだと思います。

一大丈夫って思っていた。

何となく大丈夫って……というか、あまり先も考えずに、だめだったらやめればいいんだから、そこまでまず歩けばいいじゃないっていうところで。自転車じゃないですけど、倒れたらそこであきらめようって、ただ漕いでいるだけの毎日ですかね。



ほしのひと No.1 2024年 楠、桜、胡粉 380×810×120mm



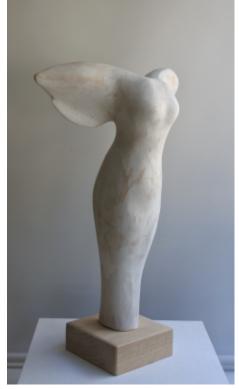
ほしのひと No.2 2024年 楠、胡粉、箔 210×540×70mm



おりたつもの 2024年 楠、桜、胡粉 310×500×210mm



かぜのように No.1 2024年 楠、胡粉 320×145×100mm



ひとつに 2024年 檜. 胡粉 455×310×130mm

一それが結果的にずっと続いて。

結果的にずっと続いているから……今年でもう だめかもしれません、あははは(笑)。

一今もずっと続いている。

今もそんな感じですね。どうにもならなかったら 働こうっていう感じですよね。たまたま何とかなっ て続いてきたという。

創造することが、こんなにも自分を 支えてくれる行為だったと気づかされた

一田人から海沿いに移られて、そこで東日本大震災 を経験して、奈良県に移住されましたね。

あのときは無我夢中で……そうですね。でも恵まれていた方だと思います。新潟の私の実家と東京にある栄作の実家が避難先として受け入れてくれて、結局、5月まで2カ月間、お世話になった感じですね。その間に避難移住先を探しました。

ーその体験が制作や表現に影響をもたらしたとお 考えですか?

そうですね、うーん……どう言ったらいいんですかね。彫刻って、作ったら100年や200年は残せるようなものをやっている気持ちでいたけれども、そんなこと全然ないんだって。自分の作品が津波で全部流されたときに思いましたね。ただ、たいしたことじゃないなって、逆に思う部分もありました。一たいしたことじゃない。

たいしたことじゃない。どうしてかっていうと、ものに宿っているんじゃないんだなって。作った自分に、ただ……自分の中に積み上げてきているだけだから、作ったものが消えたことが、そんなにたいへんなことではないんだなと思えた経験ではありました。要は自分の頭の中っていうか、自分の経験でしかなんだなって。

一ものを作ることを生業としてやってこられて、だけ ど作ったものではなくて経験なんだって思われた。

そうですね。うーん……だから惜しいとか、あん なにがんばって作ったのにとか、それほど思わな かったですね。

一震災の前には、そう思うことはなかったですか?

そうですね。わからなかったですね。自分が儚く、作品が確かなもので、そこに自分が投影されるわけだから、作ったものがそこにあれば支えになってくれそうだ、みたいな気持ちでいたんです。でも、いざ全部津波で流されたときに、自分があらためて思ったことは、あ、自分の中に全部あるっていう気づきだったんですね。もう一度また作ればいいじゃないかっていうぐらいな感じで思っていました。あとはいい道具とか、いい環境への執着もなくなりましたね。そういう意味では、いろいろ自由になったんだろうなって思います。

一表現されるもの自体は、変わらなかったですか? そうなんです。だから、そんなに変わってないん だと思うんです。

一むしろ変わる必要がなかった。

気づきとしては、制作する環境が問題ではな いっていうふうに答えが出ちゃったんですよね。 うーん、何だろう……若い頃は制作することに本 当に意味があるのかなとか、揺らぐこともあるじゃ ないですか。でも自分が追いつめられたとき、はじ めて創造することが、こんなにも自分を支えてくれ る行為だったんだということに気づかされました ね。大きな出来事が自分に降りかかってきたとき に、制作をしていると、すっと事故前とか震災前の 自分に戻れるっていうか。自分の中にシェルター があったっていうか。それが制作だったんだなっ て。震災前は制作って、もっと……生きるためにし ている何か他のことが重要で、それをやったあと の余剰の部分で自分は制作できている、もっと根 本の何かがあって、その外側に制作があると思っ ていた部分がありました。だから何か大きな出来 事があったら制作はやめてしまうかもしれないと 思っていたけれど、逆でした。

一それはかなり重要な気づきですよね。

そうですね。それぐらい、結構ふわふわしていた んですよね、自分もね。そんなに自覚もなくやって



おつかれさま No.1 2024年 楠、胡粉 330×270×110mm



おつかれさま No.2 2024年 楠、胡粉 200×110×115mm



おくりもの No.1 2023年 檜、胡粉 130×250×70mm



かぜのように No.3 2023年 楠、胡粉 180×300×115mm



かがりび 2024年 楠、胡粉、絵具 300×270×270mm



かぜのように No.2 2023年 楠、胡粉 250×270×75mm

たのが、震災が来て、こんなに自分と制作の関係 は深いというか、自分をぐっと支えていたのは制 作だったんだって。生きていく上でどれだけ支えに なっていたかということに、気づいた瞬間ではあり ましたよね。だから実感として……フランクルの 『夜と霧』とかあるじゃないですか、アウシュビッツ でたいへんな思いしているけど、創作活動してい た人は強かったとか、発狂しなかったとか。

一生きる支えになった。

佐藤忠良さんでしたっけ、収容所に……

一シベリア抑留ですね。

シベリア抑留。そういう中で耐えられる力とか。 そういうのも震災で、創造する思いっていうんですかね、それって本当に人の根源なんだなって。それぞれの人にありますけどね、音楽だったり、スポーツだったりっていうのはあるけれども、創造行為の大きさっていうのは実感しました。

人間は嫌いだったけど、 芸術を作れることには希望があった

一それを踏まえて今の制作があるわけですか。

そう言われると……どうなんだろう。これ見てお前はできているのか思っちゃうんですけど(笑)。

一制作しているときはそう考えて作っているわけではないけれどもっていうことですかね。出てくるイメージはずっと続いている感じですかね。

そうですね。続いている感じですね。一所懸命何かを作っているってことに関しては、私は人間って捨てたもんじゃないって思わせてもらえる作品にたくさん出会えたなっていうか。人間は嫌いだったけれども、作ったものに関しては、人間って素敵だなと思わせてもらえた。

一それは芸術ということですか。

芸術ですね。それを観ることで人間に希望を抱ける人がどこかにいるのなら挑戦してみたいというか、挑戦している人たちって素敵だなという気持ちはありましたね。

一自分もその一員として手を動かしたい。

手を動かしたりできたらいいなっていう思いはありましたね。人間、嫌いだったから。私、人を信じられる要素がどこにあるのかなって思ったときに、図書館で仏像の作品集や絵画を見ると、でもこれを作れるんだな、とか、そういう……希望が見えるとしたらここなんじゃないかな、という気持ちがありましたね。

-子どもの頃に美術が好きになったきっかけはある んですか?

そうですねえ……うーん。まあ、でも家族で展覧 会に行っていたのは大きいと思いますね。

一新潟市内ですか?

東京まで観に行ったりしていました。美術が好きな親だったんですね。学校の教師をしていて、それなりにやっぱり本物を見せたいという気持ちはあったみたいですね。

一文化的な環境だったんですね。

オーケストラのコンサートも、本当に小さいときです。何も知らないときに。

一東京まで行って?

それは新潟市内。ボリショイ楽団とか、ロシアから来ていましたね。

一新潟はロシアからの玄関口ですからね。

そうですね。父は若い頃は絵を描くのが好きだったみたいで、自分も観たかったんだと思いますね。

一どんな展覧会を観ていたんですか?

メトロポリタン美術館展を東京で観たとき、モネやアンリ・ルソーの作品にかなり感動しましたね。 あとはエジプト彫刻を結構、間近で観て、まるで生きているみたいと思った記憶があります。日本画の展覧会も行きましたね。加山又造とか、母が好きだった。あとは朝日新聞が出しているアサヒグラフの美術版の雑誌を毎月とっていて、ああいうのを観るのがすごく好きだった。

一すごい鑑賞教育ですね。

教育っていうより、自分が好きだったんだと思い



おくりもの No.2 2024年 桜、胡粉、絵具 485×95×70mm



かぜのみみ 2024年 楠、胡粉 145×95×70mm



おくりもの No.3 2020年 檜、胡粉、絵具 210×170×150mm



ひかりのつぼみ 2023年 楠、胡粉 350×300×270mm



だいじょうぶ 2023年 檜、胡粉 160×150×180mm



ます。あとは学校で購入した画集の箱だけをもっ を覚えている人たちのような気もします。 てきて、子ども部屋に飾ったりとか。ドガのバレ 一人間が嫌いとおっしゃっていましたが、その嫌い リーナの絵を観ながら寝ていました。

一長谷川さんが彫刻家になったことは、喜ばれてい たんじゃないですか。

父は割と嬉しかったんだろうなと思いますね。 母は学校の先生になってほしかったみたいです けど。教職とって、美術の先生になってほしかった みたいです。

一ご両親ともに先生をされていたんですか?

はい。母は途中から特殊教育の学校に移った んですけどね。ときどき上野公園に修学旅行に子 どもたちを連れて来たときに、芸大が近くだったか ら呼び出されてアテンドしたこともありましたね。 ダウン症の子とかね、そんなに重くない……

一自分たちで歩けて。

すけど。なんか、天使みたいですよね。ああいう子 たちもね、劣っているというんじゃなく、大事なこと

な部分をもたないような……

そうそう。純粋な存在として、あり続けられる人 たち。

一でも、そういう作品を作り続けているのだから、ど こかでつながっているのでしょうね。

どうなんでしょうね……そういう清らかさみたい なものを取り戻せたらいいというのか、うーん。何 ですかね、言葉にすると難しいですよね。

一言葉以前の感覚で。

ヒトって本当はそうじゃない、みたいな。発揮で きてないっていうんですか。人間の真の能力をね、 ちゃんと発揮できたら、今ここにこういう世界はな いはずなんだけど、汚れた地球が悲鳴を上げて いる。本当は楽園を作り出せるはずなのに、何か そこそこわかる、かわいいくらいの子どもたちでがおおかしいっていう思いはありますね。

> 2024年3月10日、アトリエにて 聞き手: 岡村幸官



長谷川 浩子 はせがわ・ひろこ

- 1961 新潟県新発田市牛まれ
- 1986 東京芸術大学彫刻科卒業
- 1988 東京芸術大学大学院彫刻専攻修了
- 1990 福島県いわき市に移住
- 1998 公募展「雪梁舎展」 雪梁舎/新潟 雪梁舎賞受賞
- 2006 草野天平 詩碑制作
- 2011 東日本大震災で津波と原発事故により被災し奈良県に避難移住する

個展

- 1987 田村画廊 神田/東京
- 1991 武蔵野画廊 いわき/福島(98)
- 1992 プラザギャラリー 調布/東京
- 1997 萌画廊 青山/東京(99、00)
- 1998 「ニューアートシーン・イン・いわき 長谷川浩子」 いわき市立美術館
- 2001 ギャラリーいわき泉ヶ丘 いわき/福島(01,03,05,07,09,11,13,15,17,19,21,23)
- 2008 「長谷川浩子 彫刻展」 ギャラリーエスパース 茨城
- 2008 「Feminine White」 space369 日立/茨城
- 2008 「Hiroko Hasegawa Exhibition」 ブラウロート いわき/福島
- 2009 「長谷川浩子展」 ギャルリー志門 銀座/東京(13、16、18、20、23)
- 2009 「長谷川浩子展」アートワークスギャラリー 水戸/茨城
- 2011 「長谷川浩子 木彫展」 77ギャラリー銀座/東京
- 2012 「長谷川浩子展」 橘画廊 本町/大阪
- 2012 「長谷川浩子展」 あしやシューレ 芦屋/兵庫
- 2014 「長谷川浩子 彫刻展」 MU心斎橋画廊 大阪(18、22)
- 2017 「長谷川浩子展」 ギャラリー勇斉 奈良(20)
- 2019 「長谷川浩子展」 堤側庵 三重

主なグループ展

- 1989 「第19回 現代日本美術展」 東京都美術館
- 1994 「新しい世代の芸術展94」 北トピア
- 2000 「いわきの美術V・境界を越えて」 いわき市立美術館
- 2001 「安藤栄作 長谷川浩子 彫刻展」 矢吹町ふるさとの森芸術村企画展示室

- 2005 「第4回アールエポック展」 茨城県天心記念五浦美術館
- 2009 「はじめる視点」 福島県立博物館
- 2011 「いま。つくりたいもの、伝えたいこと。」 いわき市立美術館
- 2013 アートフェア東京 「ザ・コレクション玉響」 東京
- 2014 「アリオス現代美術館」 いわき文化交流館アリオス 福島
- 2014 AHAF SEOUL2014 ソウル
- 2019 「AKIS 彫刻5人展」 画廊ぶらんしゅ 大阪(23、ギャラリー勇斎)
- 2022 「ふたりのあいだ」 もうひとつの美術館 栃木